

「落語と私」 その拾四

三代目 橘ノ百圓

10月号で書きました様に、落語に出て来る人達は、皆個性的で存在感の在る人ばかりです。では、落語の様に一人で何人もの登場人物を演じ分ける芸は、他の国に在るかと言うと、欧米でのコメディアン、古くは、ピエロも一人で舞台に立ちますが、又、小咄は各国にも在る様で、有名なのは、イギリス、フランス、ロシア等ユーモアとか、頓智に富んだ噺は多いですが、噺の中で何人も演ずるのは無い様に思います。マア「それがどうした!？」と言われますと、只ただ話しとして聞いて頂きたい訳で、落語の成り立ちも、この小咄が長く成ったと思われるものも多く在ります。又、中国の笑話しやうわからのもの、例えば「饅頭を怖うるのはなし」(饅頭怖い)「長名のはなし」(寿限無)等が代表的ですが、それに各地方に残っていた昔話から落語にしたもの「ぞろぞろ」「一眼国」等、成程と思われる噺も数多いです。初代三笑亭可楽が、どの様な形かたちで噺を演じたかは詳しくは分っていませんが、皆さんが不思議に感じているだろう上下かみしも(左右を向いて噺す)も、可楽が初演時から確立していたかどうかは、私の知っている書物には載っていませんので、いつ頃から、今の形式に成ったのでしょうか。只、この事は現在の噺家さん達は、どうでも良いと思っています。この上下等の落語の演じ分けは、またの機会に書くとして、今回は、落語の登場人物として「落語の中の女房」を、代表的2名にご登場頂きまして、私なりに比べてみたいと思います。では先ず、その2人を紹介致します。1人は「芝浜しばはま」のオカミさん(落語では、このオカミさんの名前は出て来ませんが、歌舞伎では『おたつ』です。)と、「厩火事うまやかし」のお崎さん、では、この二題を短く纏めると、「芝浜」は、組合月報6月号に書きました様に、あの三遊亭圓朝による三題噺から生まれたもので「除夜の鐘(酔っぱらい)、芝浜、革財布」のお題で出来た、毎年暮には欠かせない、人情噺?です。酒好きで、怠け者の棒手振りの亭主勝五郎を前夜の約束通りに朝早く起し、芝の浜(江戸後期は、小魚を芝浜で扱ってます。)に魚の仕入に出すのですが、女房が一時いっとき(約2時間)早く起した為に勝五郎は腹を立てるが「家へ帰って嬢を張り倒しても、又、ここに戻って来なくちゃ成らねえから」と諦めて、波打ち際に一服つけていると紐の様なもの、煙管の雁首きせるで手繰たくってみると、汚れた革財布に四十二両(五十両で演る人もいます)の小粒がギッシリ、誰も見ていないのを良い事に我家に持ち帰り「これから、この金で遊んで暮すんだ」と酒を飲んで寝てしまう。昼頃に目を覚ますと、手拭を肩にお湯屋へ、友達を多勢連れて帰って来ると、刺身、天婦羅、鰻等を取っての大盤振舞、酔ってそのまま寝る始末、翌朝オカミさんに「お前さん、起きて仕事に行っておくれヨ」と拜む様に起された勝五郎が「何言ってんだヨ、昨日芝の浜で拾って来た金で勘定済ませりゃ良いじゃねえか」「何馬鹿な事言ってんだヨ、昨日は芝の浜なんざァ行っちゃいないヨ、お前さん起しても起きやしないし、無理に



初代 三遊亭 圓朝

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

起して又、手荒な真似されるのも嫌だから、そのまま寝かしといたら、昼頃に起き出して湯に行って帰りに友達多勢連れて来て『アア目出てエ、アア目出てエ』って皆んなにご馳走してそのまま又寝たんじゃなか、いつ芝の浜に行ったんだヨ、お前さん、夢でも見たんだろ」(中略)「エッ！じゃあ何か、財布拾ったのは夢で、ご馳走したのは本当か!? おッ嬢アどうしよう」「何言ってるの、お前さんは腕の良い魚屋じゃないか、今日から本気で働けば、今の借金なんざ直ぐに返せるヨ」「おッ嬢ア済まねエ今日から酒は止めて一生懸命働くから、今度だけは赦してくれ」サア、これから人が変わった様に仕事に精を出す勝五郎、3年経つと表店に引越して、若い者を三人ほど置く魚屋の主、若い者をお湯屋に行かせた大晦日、夫婦二人きり、オカミさんが「私の話を怒らずに最後まで聞いてくれるかい!?」と、あの汚れた革財布と四十二両の金を出し「あれは夢じゃなかったんだヨ、あの金を遣ったら、お前さんの体は只じゃ濟ないと、大家さんに言われて夢で通したんだヨ、どうか赦しておくれ」(中略)「何言ってるんだヨ、手エ上げてくん、お前のお陰でこんな良い大晦日が迎えられるんじゃねエか、おッ嬢ア大明神だ」「そうかい有難う、そうと決れば、お前さんに飲んで貰うと、お酒をつけて有るんだヨ」「本当かい!? この匂いは新しい畳だけじゃねエナ、俺が言い出した訳じゃねエからナ、じゃあご馳に成るか、ほら除夜の鐘が聞えらア、こりア良い正月に成るぜ・・・やっぱり止めとこう、又、夢に成るといけねエ」実に良い落げですネ、これ以上の落げは無いと思います。これが「芝浜」のオカミさんです。

次に「厩火事」のオカミさんの紹介です。名前は、お崎 髪結を生業としている職業婦人、亭主は案の定「髪結の亭主」で昼から酒を飲むと言う始末、「お崎さん、また夫婦喧嘩なんだろ!?」で始まるくらい、のべつ夫婦喧嘩、仲人の旦那も呆れて「お崎さん、今日はどう言う了見で家へ来たんだい」と訊くと「今日てエ今日は、愛想も小想も尽き果てましたんで、旦那に相談をして、別れさせて頂こうと思ひましてネ」旦那が事情を訊くと、些細な事での喧嘩「アッそう、お前の亭主は女房を働かせて、昼間ッから酒を飲んでる男だ、お別れ、お別れ、縁が無かったんでしょ」と言われたお崎さん「そりアそうですけど、お酒を飲むと言っても、二升も三升も飲む訳じゃなし、内の人のお事そんなに悪く言わなくても良いでしょ」「何んだヨ、お前が別れたいてエから話をしてるんだ。どうしようてエんだイ」「どうしろって、旦那焦りたい」「こっちが焦りたいヨ」お崎さんの話を聞いてみると、本心で別れようと思っている訳では無く「私の方が、歳が若けりゃ良うでござんすヨ、七ツも上なんじゃ在りませんか、ですからネ、内の人の方が本当に私の死水を取ってくれる人なんだか、そうで無いんだか、そこが知りたいんですヨ」そこで旦那が、唐土(中国)の故事から、孔子が留守の間に、ご寵愛の白馬が焼け死んだと聞き、家人の安否だけを気遣い、馬の事は一言も訊かなかった、これが一事が万事、反対に「麴町のお屋敷にさる旦那様が居らっしゃった」「マア、猿がお屋敷の旦那に成ったんでございますか!?」「お前ねエ、そう言う事だから亭主と喧嘩をするんですヨ、名前が言えないから、さる旦那様」と、この旦那様が大切にしているお皿を奥様が二階から下ろす時に、足を滑らせて、一ツ気に下まで・・・。その時、この旦那は「皿は大丈夫か、皿は壊しやしないか!?」と息も継かずに、三十六遍お喋ったとの話「お前の亭主が、瀬戸物に凝ってるてエなら丁度良いや、これから家イ帰って、亭主の一番大事にしている瀬戸



白馬

出典：http://sakamitisanpo.
g.dgdg.jp/umayakaji.html

物を何処かにブツケテ、滅茶滅茶に壊してごらん、どっちを訊くか!?お前の一生だヨ遣ってごらん」こう勧められ、意を決して長屋に帰ると、亭主が「お前エと一緒に飯食うと待ってんじゃねエか」「マア、お前さん唐土だヨ、じゃあ私は瀬戸物に執ッ掛るから」と、亭主の大事にしている皿を持つと亭主が「その皿は駄目だ、元に戻せ」と大声で怒鳴られ「これだから心配に成っちゃうんだヨ、今唐土だと思ったら、直ぐに麴町の猿に成るんだから」と訳の解らない事を言いながら、前もってズラせておいた楊板に足を踏ん込んで、皿を竈(かまど)の角にぶつけて壊してしまう。亭主がそれを見て、お崎さんの元に駆けつけると「お前、どっか怪我しなかったか、指か何んか怪我しなかったか!?」「マア嬉しいねエ、お前さん、そんなに私の身体からだの事が心配かい!?」「当り前エじゃねエか、お前エに怪我でもされてみねエナ、明日ッから遊んでて酒が飲めねエヤ」これも“とたん落”です。以上が対照的な二人のオカミさんです。貴方は何方の女性が好きですか!?「芝浜」のオカミさんは思慮深く優しい、多分、亭主に逆らったのは、これが初めてでしょう。魚屋は朝の早い仕事ですから、毎日早く起き、朝飯の仕度をして、勝五郎を送り出した後は、小マメに働き遣り繰り上手、非の打ち処の無い女房かも、只、こう言うカミさんは少々窮屈かな!?男って勝手ですネ。反対に「厩火事」のお崎さんは、朝寝坊で料理下手、気が強くて亭主が一言言うと、二十言も三十言も返って来るし、喧嘩の絶える間が無いと思いますが、絶対に何処か憎めない、可愛い女だと思います。何故か家に居ると心が癒されるかも!?これは間違い無く皆さんの好き嫌いですネ。これが結論かな。次回も「落語の登場人物」で書きたいと思います。お楽しみに。



女髪結

出典：<http://sakamitanpo.g.dgdg.jp/umayakaji.html>